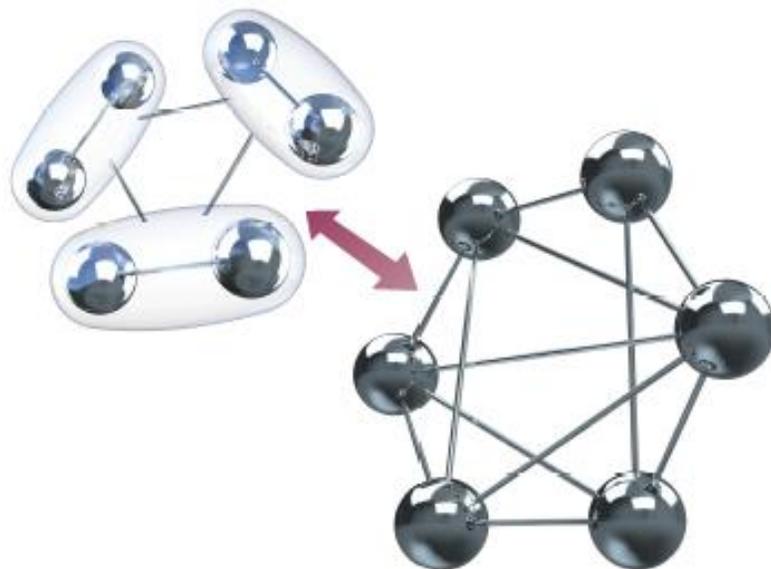


「モジュール化」対「すり合わせ」研究会



日本は、液晶、半導体、太陽電池、スマートフォン（スマホ）などでも、世界シェアを急激に低下させた。なぜ日本の競争力は急激に低下したのか？

その原因として、個別企業の競争戦略、経営者の経営判断とともに、「産業構造」の変化があげられる。「産業構造」の変化の一つは「デジタル化」の進行による「すり合わせ」から「モジュール化」の変化だ。

この課題に対応するため、日本MOT学会に下記研究会を設置することが理事会で承認されました。

このため、研究会会員を日本MOT学会会員から募集いたします。なお、研究会へは、日本MOT学会会員以外でも参加できます。

名 称： 「モジュール化」対「すり合わせ」研究会

目 的：「デジタル化」によるビジネス・アーキテクチャの変化、つまり「すり合わせ」から「モジュール化」への変化の視点から、日本ものづくりを分析することを目的にする。
この分析をもとに、日本のものづくりの競争力強化を提言する。（詳細は2頁目に記載）

会 費：無料

活 動：年3回程度の研究会を開催する。

活動期間：2016年4月1日から2018年3月31日までの2年間

活動費：日本MOT学会からの10万円/2年間

発起人：代表者：中田行彦（立命館アジア太平洋大学 教授）

児玉 文雄（東京大学 名誉教授）、柴田友厚（東北大学 教授）

玄場公規（法政大学 教授）、元橋 一之（東京大学 教授）

新規の参加希望者は、随時受付ます。下記情報を記入し、中田 (nakata@apu.ac.jp) までメールで申
込ください。氏名、所属、住所（郵便番号）、メールアドレス、日本MOT学会の会員か否か

(詳細説明)

1. 研究会の名称： 「モジュール化」対「すり合わせ」研究会

2. 目的：

日本は、液晶、半導体、太陽電池、スマートフォン（スマホ）などでも、世界シェアを急激に低下させた。なぜ日本の競争力は急激に低下したのか？

その原因として、個別企業の競争戦略、経営者の経営判断とともに、「産業構造」の変化があげられる。「産業構造」の変化の一つは、「デジタル化」の進行によって「すり合わせ」から「モジュール化」の変化だ。

Baldwin and Clark (2000) は、「モジュール」の重要性を述べ次のように定義した。「モジュールとは、その内部では構造的要素が強く結びつき、他のユニットの要素と比較的弱く結びついている」。モジュールを組み立てることにより、短期に安価な製品が生産できる。

一方、藤本(2004)は、日本に適するビジネス・アーキテクチャは、サブシステム中の調整を必要とする「擦り合せ型（すり合わせ型）」と指摘した。

日本企業は、従来「すり合わせ」型が強いと言われてきた。しかし、産業構造は、自動車、液晶、半導体等の多くの分野で、「すり合わせ」から「モジュール化」へ大きく変化している。

自動車産業においても、急速にグローバル化と「モジュール化」が進んでいる。トヨタのTENGA (Toyota New Global Architecture)、日産のCMF (Common Module Family)等である。どのように「モジュール」に分解し、また「モジュール」をどの国で生産・組立て・販売するか、グローバル化と「モジュール化」に対応する必要がある。

液晶産業でも、パソコン用液晶は2000年頃に「モジュール化」して台湾・韓国のシェアが拡大した。液晶テレビも、2009年頃から「モジュール化」してきた。最後に残ったスマホ用液晶も、2011年頃から「モジュール化」し始め中国製スマホが台頭してきた。また、Googleは、アラというモジュール化スマホを市場に出そうとしている。

更に、「モジュール化」は、デザイン・ルール等を形式知に落とし込むため、形式知をデータ化して情報処理し易い。つまり、形式知をデータ化して情報処理する、IoTやインダストリー4.0などの最新のものづくりと相性がよい。

このように、産業構造が「すり合わせ」から「モジュール化」へ大きく変化する中で、日本企業はどのように対応すればいいのか？

Baldwin等の著書が出版されて「モジュール化」が注目されて約15年経過した。しかし、「モジュール化」と「すり合わせ」というビジネス・アーキテクチャの分析フレームワークはまだ有効である。いや「デジタル化」の進展により、益々重要性を増している。

このため、本研究会の目的は、「デジタル化」によるビジネス・アーキテクチャの変化、つまり「すり合わせ」から「モジュール化」への変化の視点から、日本ものづくりを分析することにある。この分析をもとに、日本のものづくりの競争力強化を提言する。